

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別被承認雑誌第六二七号
平成二十五年九月一日発行(第百十六卷第九号)

ホトトギス

九月号



俳句随想 〔三百七十五〕

汀子

選句について考えたい。「選もまた創作なり」と虚子が唱えたことは有名であり、それ故選句の大切さをつくづく考えてしまう。私は今、「天地有情」の募集句の選をしているが、投句は二句、何れも自選二句は珠玉の作品である。俳歴が長いから必ずしも名句を投句されるとは限らない。ある程度のレベルにある方の投句ならば二句とも選ぶことが安易に出来るのであるが、それらを一句にするのは難しい。しかし八月号は千四百号に当たるのでこれまで通りの選をして、九月号から、出来るだけ一句に絞って載せてみようかと思っている。ご了承頂きたい。

その後はそれらの結果を見てから考えて行く。しかし二句入選を巻頭から何名と決めるのではなく、又没の方が出るかも知れないが次回奮起して頂きたい。珠玉の一句又は二句を選ぶために私も選句に力を入れて行く。マンネリズムからの脱却をやり遂げられるであろうか。やって見なければ分らないが、九月号の天地有情の結果をご覧頂きたい。

句日記 汀子

平成二十四年九月一日 菅屋ホトギス会

新涼の朝のはじまる雨上り
怪我癒えてはや仲秋といへる頃
日本橋生れの母に震災忌

九月二日 下朝句会

どの花の使も親しみてゆく花野
左手も使つてをりぬ秋の夜
又元の生活に戻り秋の夜
近づける忌日を告げて鉦叩
一と雨のありしを告ぐる秋の夜

九月三日 ロイヤル俳壇

秋めくと思ふことより朝の来る
この日待ちぬし本復の秋となる
説明は簡単にして露けしや
二十世紀梨の昔の味なりし
空白の時間消しゆく夕月夜

九月十一日 大阪倶楽部

しばらくの病院通ひ曼珠沙華
雨もよひ早々点す秋灯
爽やかや日にちぐすりといふ言葉
露けしと思ひて一と日過ぎ易く
今日のこと明口に残して露けしや
秋の灯を足して三十三回忌
九月十一日 綿業倶楽部
籠りぬて残暑忘れてをりしこと
リハビリや残暑かこちてをり乍ら

病院の外は残暑と知らされし
消息のはたと途絶えし残暑かな
九月十三日 清交社

宵闇の星に心を置き替ふる
風一過葛の花の香ひゆるがへし
健康を取り戻さばや露踏みて
夜々空を仰ぎ来しこと宵闇に
術後とて馴れねばならぬ露の道
九月十四日 工業倶楽部

はるか来て今宵は月の宿りかな
癒えしと思ふ外出や月今宵
鉦叩聞けば三十三回忌
月仰ぎつつ生きてゐしこと確か
九月十六日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

志高く爽やかなりし日よ
あとは日に日に快方の秋ならむ
爽やかに会ひたき人に会へし会
九月十八日 有恒俳句会

剪ればすぐほほけてしまふ芒活け
蓑虫の糸の長さに隠さるる
雨の音消えてしまひぬ芒叢
こんな日でありしと秋の雨を見る
降る雨も久し振りなる秋一日
外からは見えぬ傷跡秋の風
九月十八日 無名会

一つづつ予定こなし秋灯下
花の名は知らずに秋の草とのみ
刺へ警報も出らん秋の雨潮
傷癒ゆる日も近からん秋の雨
会場は隣の秋の灯の下に

露けしやリハビリ続けねばならぬ
又元の生活に戻り灯下親し
九月十九日 夏潮句会

戸締りを忘れてをりぬ地虫鳴く
暁の雲の一片鱗鱗雲
鱗雲染めてあしたはきつと雨
胡蝶蘭もて快方を祝はるる
ほほけたる世にもある見頃かな
旅に会ひ祝賀会にも会ひし秋
外見は健康さうよ露の秋
九月二十一日 句会と講演の会

癒ゆる日を願ふは同じ癩祭忌
露けしや人の命はあるがまま
九月二十七日 きさらぎ会

何一つ変らぬ如く冷やかに
冷やかにふりかへる身となりけり
冷やかになり現実の見えて来し
又薬飲み忘れしと冷やかに
露草の花に日和を托しけり
九月二十八日 時雨句会

オリオン星座より秋めいて来し
左手をかばふ右手の夜なべ置く
居眠りの手だけ動いてある夜なべ
気をとられはじめし秋の蚊を叩く
九月二十九日 北信越ホトギス俳句大会前日句会

色の浜にも歳月を托す秋
台風の近づく旅と承知して
九月三十日 北信越ホトギス俳句大会
句碑といふ邂逅の秋なりしかな
待宵の雨は今宵へ及びけり
台風の真只中の帰路となる

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十四年九月一日 夢二全国俳句大会

九月二日 野分会菅屋例会
厄日てふ忌日の空の気紛れな

竹の春逝かないで僕のかぐや姫
萩に来てより素通りの出来ぬ風
萩の戸を押せば佳人の居る母屋
爽やかに怪我語らるる主宰かな

九月三日 カトリック新聞選者吟

水中花神の造化の端にゐて

九月四、五日 「松の花」七百五十号記念俳句大会

秋の蚊を払ふ越後美人の所作
新米の話題も祝ぎの句座らしく

九月六日 焦心会

鶏頭の淡きに偲ぶ心もて
秋草に下町の風及びけり
自転車にぶつかられたる残暑かな
蚯蚓鳴く僕はすつかりグロッキー
底紅の底の底まで羽音寄せ
棺桶に足を突つ込みたき残暑
時計草時を止めたる残暑かな
竹の春日表といふ輝きに
九月より稲畑汀子復活す

九月八日 伊勢神宮献詠俳句大会

草に消え伊賀忍者めく稲雀
拍手の響き新涼纏ひつつ
筆築の音色に灯下親しめり
九月十日 朝日カルチャー若草句会
その中の紅は花野の要とも

街騒を一步入れれば地虫鳴く
癒ゆること願ひ夜長の祈りかな
木道の先に溶けゆく花野かな
摩天楼底の一隅地虫鳴く
図らずも二人残されたる夜長
九月十一日、十二日 徳源寺句会秋の吟行会

本当は撫子もつと強いかも
白露の日君と付き合ひ出したのは
里芋や里は変遷繰り返す
撫子や尻に敷かれて二十九年
九月二十日 ホトトギス社句会

木曾馬の露けく我を見る瞳
蕎麦の花木曾の山気を吸ひ込めり
九月十三日 土筆会

三瓶野の句碑は松虫草に向く
秋の蠅もう手を擦らぬ足擦らぬ
秋の蠅にも注がれし神の愛
九月二十三日 野分会東京例会

菱の実に水饒舌になりゆけり
菱の実や御嶽山は見えずとも
夜なべして出すホトトギス九月号
夜なべおきワイングラスに手を伸ばす
九月十四日 六甲会

八階の虫壳へ子等走るはしる
木道の尽きて花野の色生るる
上毛の三山指呼に厄日かな
九月二十五日 若水句会

きちかうに塗り替へられてゆく狭庭
仲秋や癒えゆく人に会ひたくて
仲秋や少し安心出来しこと
きちかうの咲いて表情生れし野
仲秋や今までほんま御苦労はん
九月十五、十六日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

秋の益近付いてきてなほ淋し
秋鯖を捌く嫁歴五十年
秋鯖の太平洋を恋ふ眼
吾亦紅にも風染めてゆく力
吾亦紅にも風染めてゆく力
九月二十九、三十日 北信越ホトトギス同人会 大会

九月十八日 草木瓜会

大会に怒濤の九月締め括る
初鴨に越前の景入れ替はる
雨男 我に颯風近付き来

とんぼうに空整つてゆきにけり
とんぼうの濡れ色といふ羽の色
颯風の下人小さく人小さく
颯風のやうに迷走したる我
とんぼうと風竿の先競ひ合ひ
颯風の一生といふ十日間

朝霧に富嶽の威容紛れざる
秋晴の句碑秋雨に彩られ
伽石は虚子の分身句碑の秋
萩咲いて気比の松原鎮もれり
宿に借る秋雨傘は女性用
神宮の歴史をここに新松子

九月二十日 登高会

三十年余過ぎし白露のあの日より
芋を食ひ短詩型文学を詠む

雑詠

廣太郎 選

藤浪のしぶきをりけり神の杜 奈良 古賀しぐれ
 かけのぼり神の藤浪雲に立つ 同
 全山を光の海にして新樹 同
 日時計の十時の日差したんば黄 徳島 岩田公次
 これ以上薄くはなれず種袋 同
 目刺食べたしと退院第一夜 同
 正眼の構へ翡翠くづしけり 東京 橋本くに彦
 朝顔を時き菊坂の路地暮し 同
 金魚屋の仕分け手早き目の子算 同
 蝨の道そこはへアピンカーブして 相模原 木村享史
 露の臺貫ふ何するつもりなく 同
 青空を連れて苗木をかうて行く 同
 のどけしや問ひみて独り言めきぬ 香川 湯川 雅
 春愁の不確か潮の香の確か 同
 陰に咲きゐて蒲公英は日向の黄 同
 花冷の靴美しく並びけり 熊本 岩岡中正
 白髪の上を鳥の帰るなり 同
 亀がちよと貌あげて春惜みけり 同

惜春の心閉ざしてゐる水面 龍ヶ崎 今橋眞理子
 行春の我が青春に触るる街 同
 春宵の第二楽章流れくる 同
 而して卒寿の花を浴びにけり 福山 竹下陶子
 天守閣みぢんにしたる花吹雪 同
 蹲踞の柄杓に初音掬びけり 同
 半分の客は眠りて能日永 神戸 山田佳乃
 ゆるゆるとシテの一步に花の散る 同
 囀や涙零せるシテの面 同
 早逝の父とこの梅見し記憶 徳島 上崎暮潮
 梅探る後ろ姿の眉山見て 同
 風といふものありけり梅が枝 同
 七彩の伸びて丸まる石鹼玉 東京 内藤呈念
 行春の郵便受をまたのぞく 同
 行春のハンカチの木の苞ゆるる 同
 国旗出し建国記念の日は休業 同
 靖国の鳩小屋覗く雀の子 同
 佳人みな去り春寒の北の丸 同
 銀の波寄せくる茅花流しかな 神戸 涌羅由美
 風まとひ軽さをまとひ更衣 同
 膝小僧すり傷ひとつ更衣 同
 ゆるやかに落花と時間漂ひぬ 檀原 稲岡 長
 夜立てる枝垂桜の幹怖し 同
 桜散る芳野川にも鮠棲めり 同

雑詠句評（八月号より）

公次・純也・比奈夫

さい雪・仁義・佳乃

しげ人・一步・雅

くに彦・廣太郎

野に遊びいつか一暮星の空 神戸 山田佳乃

野遊びをしていて気がつくとき、空には一番星が輝きはじめていたという。それだけ、何もかも忘れて遊びに夢中になっていたというのであつて、ピクニク気分を十分に満喫している様子が想像される。

筆者などのように、田舎に住む者にとっては、あまり経験しないことで、いかにも都会に住む人の野遊といった感じの句であると思う。（公次）

春の麗かな日差の下でのピクニクは気持の良いものである。家族か、又は友達同士の和気藹々と遊ぶ姿が見て取れる。そんな楽しさのあまりついつい時間を忘れて長居をしてしまい、空もだんだん暮れてくる。それを「一番星の空」と表現したところが何とも詩的で感動的である。（廣太郎）

土に音水に音して落つ椿 東京 橋本くに彦

水べにはえている、多分、大椿なのであろう。土に固い音を立てて落ちる花もある。あたりの静寂な感じが伝わって来る。ただ、文法的に言えば、「落つる椿」でないと、「落つ」は終止形だから、「椿」という名詞には接続しない。「落椿」とするか、「椿落つ」では、まずかつたのだろうか。（純也）

花卉がはらはらと散る桜等と違い「椿」は散る、というよりも花の形を崩さずにぼとりと落ちる、という表現の方が適切な位その終の姿は特徴的である。その落ちた先が、土の上であつたり、又水面であつたりする、その微妙な音の違いに着目して、視聴覚的な広がりのある句となつている。（廣太郎）（以下略）

天地有情

二十五年祝ふ初音の次々に
 雷雨後の大花日和となりし句碑
 余呉の湖歴史もろとも鳩潜る
 句碑沈め鳩の湖てふ淋しさに
 吉野山けふ晴れやかや花は葉に
 園手入れ済むふらこも新しく
 花の宿つくづくみんな俳句好き
 みよし野の山気春眠ひと払ひ
 歩を合はず歩幅に春を惜みけり
 花の下花鳥諷詠自在かな
 春塵にあらざ机上のゴムの屑
 名草の芽雑草の芽もやはらかに
 花吹雪明日見に來いと言ふ電話
 花吹雪とは花に問ひ人に問ひ
 母の日やセロファン濡れし花を抱き
 ふり向きし時もうはぐれ祭町
 連れられて娘の好きな花に会ひに
 下車もせず花のトンネル通り抜け

福山 竹下陶子
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 長岡 安原 葉
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 東京 橋本くに彦
 同
 榎原 稲岡 長
 同
 熱海 嶋田 一歩
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同

花冷となる刻々の日差かな
 運転に始まる花見疲れとも
 かく冷ゆる一と日なれども春の行く
 句敵といふ親しさや桜餅
 樹の命草の命に五月来る
 去つて行くものを去らしめ五月来る
 水音も木々の葉ずれも初夏の声
 明るさに隠れることも朴の花
 犀川に古り春陰の母子句碑
 玉砕の子を呼ぶ句碑に散る桜
 マロニエの咲くにつけても鬨志湧く
 カーネーション妣にはやはり赤似合ふ
 わが生のいつまで続く日脚伸ぶ
 目を凝らすことに馴れ來し梅探る
 相聞のごとくに橋や花の散る
 かばかりの土に咲きたる菫かな
 富士白きゆ糸白梅の香を放つ
 火の神の涙ともなく椿落つ

福知山 松山ひとし
 同
 東京 山田閨子
 同
 大阪 蔦 三郎
 同
 神戸 長山あや
 同
 金沢 藤浦昭代
 同
 神戸 三村純也
 同
 徳島 上碯暮潮
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 静岡 須藤常央
 同

花子選

天地有情句評

汀子

花の宿つくづくみんな俳句好き 龍ヶ崎 今橋眞理子

花の宿の雰囲気語る作者もまたその一人。

歩を合はす歩幅に春を惜みけり 東京 橋本くに彦

春を惜む心の触れ合い。

雷雨後の大花日和となりし句碑 福山 竹下陶子

春塵にあらず机上のゴムの屑 榎原 稲岡 長

雷雨に洗われた天地に見事な花日和となった句碑除幕。

春塵の季節に加えて消しゴムの屑。

句碑沈め鳩の湖てふ淋しさに 東京 稲畑廣太郎

花吹雪明日見に來いと言ふ電話 熱海 嶋田 一步

句碑が壊れて沈んだ琵琶湖の淋しさ。

明日、花吹雪が見られるという誘いに乗ったのだろうか。

吉野山けふ晴れやかや花は葉に 長岡 安原 葉

母の日やセロファン濡れし花を抱き 東京 今井千鶴子

吉野山の花の季節も終った静けさと晴れやかさ。

母の日を祝われる幸せ。

(以下略)